
瞳子の日常

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳子の日常

【Nコード】

N0276Y

【作者名】

七崎 雨

【あらすじ】

私のうちには、変な絵がある。といっても変なのは見た目じゃなくって……『とーこー！オレを鑑賞しろー！』　うちの絵画、しゃべるんです……。ナルシストおバカな絵画と、女子高生瞳子の短編連作。　拍手に最新話がのっています。

宿題（前書き）

ノリだけでできています！

宿題

私の家には、変な絵がある。

『おい瞳子、ちよつと小一時間オレ様の観賞をしろ！そして褒め称えろ！』

壁に掛けられた綺麗な絵が、いつものようにそうわめいた。

言っておくけど、私の頭がおかしくなつたわけじゃない。

「い・や！あたし宿題するんだもん！3秒で我慢して！」

『なんでだよ！？見るこの美しい情景、鮮やかな色合いを！すばらしいコバルトブルーじゃないか！ああ、さすがオレ！』

たしかにフランス帰りのこの絵画は、輝きながら息をしているような青い海と、まあるい月の浮かんだ夜空がとても幻想的だ。私は絵についてはよくわからないけれど、初めてこの絵を見た時にはその青の美しさに思わず息をのんだ。いきなり話し始めた時には、思いつきり叫び声を上げたけれど……。

こんなに神秘的な絵なのに、どうしたらそんな性格になつたんだろうか。人は見た目によらないって言うけど、それって絵にもあてはまるのかな？

『嫌だー！瞳子、オレを見ろ！オレだけを見てくれええ！』

「あーもう、昨日ちゃんと見たでしょ！わがまま！」

今日も今日とて、絵画は粘着彼氏みたいな発言をしてくる。彼は何しろ人に見られるのが大好きで、常に誰かに見つめられ、褒められていたいということなく病んだやつなのだ。多分彼は全人類が一生自分のことだけ見て生きていけばいいと思っている。ならいつそ美術館にでも行けと思うけど、母親が一目惚れして買ったかなり高価な絵らしいし、帰ってきた母親に『ああ、今日も素敵な青色！最高だわ！』と褒め称えられるのを彼も楽しみにしているようなので、取りあえずそのままにしている。

『オレの青の美しさは、シャガールをも超えるぞ！お前は恵まれた

環境にいるんだ！もつとオレを褒める！」

「絵画、怒られるよ……」

シャガールの青を見たことはないけれど（見てみたいなー、とか言ったらうちの絵画はどんな顔するんだろ）、そんな簡単に芸術を貶してはいけないとおもいまーす。

「さて、宿題でもやるとしますかねー」

「いやだ、瞳子、とうこおお！」

絵画の叫び声。これに絆されてはいけない。前に、あんまり悲しい声を出すので戻ってやったら3時間ほど観賞させられたことがあった。

『とーこー！とうこー！』

………。ほだされては、いけない。

「はやく、宿題おわらせちゃおう……」

子供のように私を呼ぶ声を背に、私は自分の部屋のドアを開いたのだった。

ホットケーキ

「うん、我ながらおいしい」

私は自分で作ったホットケーキをぱくりと頬張った。

ホットケーキごときで作るとか言っちゃいけないかもしれないけど、私の主食はホットケーキだ。ホットケーキさえあれば生きていける。科学の限界も超えてやるぞ！

『なー瞳子、それうまいのか？』

「うん、世界で1番おいしいよ」

『オレが見たことある料理の中では3番目くらいにまずそうだぞ』

「わかってないねー。ホットケーキは全ての食材にマッチするのはちみつとかお好みソースはもちろん、ハム、チーズ、肉じゃが、納豆に漬けものだって最高の味にしてくれるんだよ？」

『そうだったのか！知らなかった、いつか食べてみたいもののリストに追加しておこう』

「え？絵画ごはん食べたいの？」

私はもごもごマグロのお刺身を頬張って聞くと、絵画は『まーな』とそっけなく答えた。

絵画はもちろん絵画なので、食べたり飲んだりはできない。どこまで感覚があるのかはちよつとわからないけど、とりあえず視覚と嗅覚はあるみたいだ。

「そっか」

……なんだかちよつと絵画が可哀そうに思えてきた。絵画がごはん食べるなんておかしいことだけど、そりゃあ目の前で毎日こんなおいしそうなもの食べられたらそう思っちゃうよね……。

「絵画……」

私が視線をやると、絵画は我慢しきれないというように息を吸って……

『だあああ！そんなことはいいから、さっさとオレを観賞してくれ

！瞳子はなんでオレ様みたいな素晴らしい絵の横でそんなくだらな
い行為をしてられるんだ！？もっとオレを褒めろ！食い物なんてい
つでも食えるだろ！』

え？くだらないこうい？

『この瞬間のオレは、今しか見れないんだぞ！一瞬一瞬オレは変化
していくんだ！四六時中見ている！そして褒めろ！』

それが世界の真理だ！とばかりに言い放った絵画。

同情して損した。……人の思いを、ホットケーキを、一体な
んだと思っっているんだ！

私は席を立つて、それから……

「……よいしょ」

『おい瞳子、何を、うわ、やめろー！ううえあ！』

絵画を壁から外すと、床に置いた。うつ伏せ（？）に。

『つめたい、つめたいぞ瞳子ー！』

「あ、温度感覚あったんだ」

私は再びソファに戻って、ホットケーキをぱくつと口に入れる。

うん、おいひい。

『とーこー、暗い、見えないー！とーこおお！』

「……食べ終わるまでがまんしなさい」

ホットケーキを侮辱するものは許さないぞ！子供みたいにみーみ
ー言い始めた絵画を無視して、私は食事を続けるのだった。

ホットケーキ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

こんなかんじでだらだらしたり、ときどき新しい子たちもでるかもしれないません。

あとこのページ、目がちかちかしないでしょうか……？

もし見にくいとかあれば（もちろんなにもなくても）、コメントいただけると嬉しいです。

拍手に新しいお話をあげたので、よろしければそちらも……（さくしゃがこつちをみているぞ！）

ねこ

『なあ瞳子ー、こいつらは何故こんなにドロドロドロドロしているんだ？』

夜、今流行っている恋愛ドラマを観ていると、絵画が不思議そうな声で言った。

「恋愛ってこういうものだからだよ。女の嫉妬は怖いって言うでしょ？」

私はそう言っただけで画面に見入る。しかしヒロインが、自分の恋人と親友のらぶらぶシーンを目撃したところで、エンドロールに入ってしまった。続きはまた来週。

「あー、ほんとに焦らすよねー。こっちの方がやきもきしちゃうよ」

私はそう言っただけで、机の上の蜜柑を食べる。この前青りんごを絵画の前で食べようとしたら、『オレはそんな色を青とは認めない！』と大騒ぎしてうるさかった。緑でも青信号だし、昔は緑も青って言うてたんだよ、と言っても絵画は『意味がわからん！青は青だ！』とまったく聞きいれる様子がなかった。本当に面倒な絵画である。

私はCMを眺めながら、ぱくりと蜜柑を口に入れる。

オレンジ色の蜜柑はよく熟れていておいしい。ちなみにすじは面倒にならない程度には取るけれど、別に付いていても気にはしない。付いてた方が栄養あるって聞いたけど、本当かな。

『ほー……そういうものか。オレには理解できないな』

「まあ私もさっぱりしてる方が好きだよ。昼ドラとか大変なことになってるときあるしね。あ、でも『この泥棒猫ー！』っていうのは1回くらい言ってみたいかも」

でもやっぱりそんな展開になったらめんどくさいかなー。うーん、やっぱりいいや。お前はもう死んでいる！とかは現実にあつたらホラーだし……月に代わってお仕置きよ！とかがいいかな？そういえ

ば今の美少女ものつて素手で戦ったりすることあるよね。パンチとかキックとか。やっぱり手ぶらの相手に道具はダメってことなのか？ただでさえ敵1人对大勢とかあるし……まあどうでもいいか。『瞳子、まさか……あのぐにやつとして毛の生えただけの、にゃーにゃーうるさい奴らが好きなのか……？』

なんかゴから始まってりで終わる、黒光りするアレみたいな言い方するな……。

「そう言う意味のセリフじゃないんだけど……まあ好きだよ、猫。可愛いし」

私が言うと、絵画はくわつと顔色を変え（たぶん人間だったら、という比喻表現だけど）て、『そんなバカげた話があるか！』と大声を出した。

「あいつらがかわいいだど！？とんでもない、あんな下劣な下等生物ども！」

「……ねこちゃんバカにするんじゃないやありません！　で、一体何されたの？」

絵画は基本的に自分のことしか興味がないので、特別何かを好きになったり嫌いになったりすることが少ないと思う。この取り乱しようは、きつと何かあったに違いない。

絵画はうおおお、と唸ってから、心底思い出さたくないとも言ように重々しく言った。

『あいつらは……オレのこの高貴なる身体に……ま、マーキングを……！』

あ、なんかわかった。

「……絵画、ちょっとお風呂場に……」

『未遂だ！かなり昔のことだしな、しかしあいつらときたら、ぐぬぬぬ……』

相当なトラウマになっているらしい。気持ちは分からなくもないけど……いやでも、私はやっぱりねこちゃんが好きだ！

「きつとほら、猫もさ、絵画が綺麗だからマーキングしたくな

「つちやったんじゃないかな……？」

苦笑いの末に私は優しさを込めて、絵画にそう言った。絵画は少しの沈黙の後、

『お、おお、なるほどな！あいつらもなかなかわかってるじゃないか！よし、もうこわくない、こわくないぞー！』

絵画はそう言ってまた、『とーこ、オレのどくら辺がどうきれい
か具体的にいってみろ！』とかふんぞり返ったけれど、次の瞬間テ
レビに映った猫を見て、『ぎゃ！』と声を上げていた。

「……………絵画、絵画はねー、まずこの海がすごくいいと思うの。
神秘的なのに、それでいてお母さんみたいにあったかいかんじがす
るよね。あと私はこの黄色い、とろけそうな、ホットケーキのバタ
ーみたいな月も綺麗だと思うなあ」

『お、おお、わかるか瞳子ー！さすがオレの所有者の娘だ！』

もつと褒めるとふんぞり返る絵画に、私は空が綺麗とか、やつぱ
り青色がいいとか、いつもの倍くらい丁寧に絵画を褒める。

『ふふん、さすがオレ、あのぐにやぐにやどもにもこの美しさを悟
らせてしまったんだな！』

満足そうに笑う絵画を見て、私は引き攣った笑いを浮かべた。

明日知人のねこちゃんあずかるの、絵画にはまだ黙っておこ
うかな……。

ねこ（後書き）

拍手お礼なのにローテーション早いよ！と思いながらも、なぜか書きたくなってしまったので更新です。このように今後も気まぐれに更新したり停滞したりすると思われます。

拍手も更新しました！よろしければそちらもどうぞ。そして感想や突っ込みなどをいただけるととてもうれしいです。

読んでくださってありがとうございます！

いとこ1

「夏目ちゃん、いらっしゃーい！さ、入って入って！」

「久しぶり、瞳子。元気そうね」

今日はいとこの夏目ちゃんが遊びに来てくれた。夏目ちゃんは私と同じ年の女の子だ。今は遠くの学校に通っているからあんまり会えないけど、小さい頃はよく一緒に遊んだりしていた。

「おじゃまします。はい、これお土産」

「わー、ありがとう！……おばさん今度はカナダに行ったの？」

手渡されたのは、瓶入りの高級そうなメープルシロップ。前来た時にはたしか、フランスのマカロンだった気がするけど。

「ちよつと前まで。今はイギリスにいるって言ってたわ」

夏目ちゃんのお母さん、つまり私のお母さんのお姉さんは、いつも世界中を飛び回って仕事をしている。

「そっかー、おばさんも忙しそうだね」

「まあ、本人が楽しそうだから良いんじゃない？でも瞳子のところも大して変わらないでしょ」

「あはは、でもうちは夏目ちゃんとはほどではないよ」

私のお母さんも、夏目ちゃんのお母さんほどではないにしろ、絵画を買えちゃうくらいにはバリバリの仕事人間だ。夏目ちゃんも将来は出来る女になりそうだし、やっぱり血なのかな。……え、私？

えへへ……。

「うれしいなー、こんなに高級そうなメープルシロップはじめて！」

「あんだ、まさかまだあのおかしな食生活続けてるわけ……？」

夏目ちゃんが眉を寄せて言う。

「失礼な、ホットケーキは最高の食べ物だよ！？それにちゃんと、おかずとして野菜も魚も食べてるから大丈夫！」

「いや、それがおかしいと思うんだけど……まああんだがいいならしいわ」

夏目ちゃんは、一応栄養は摂ってるのよね……？と苦笑いを浮かべたけれど、その後は何も言わなかった。よし、今日は夏目ちゃんにホットケーキの巣晴らしさを教えてあげよう。その瞬間私の中で、今日の献立が決まる。今日の夜ごはんは、豪華に手巻きホットケーキだ。あとでお刺身買わなきゃな！。

『夏目、よく来たな。お前も早くオレを見たくてたまらなかっただろう。』

リビングに入ると絵画がふんぞり返ってそう言った。絵画の中では、世界中の人が絵画に日々焦がれていることになっているらしい。ほんと、こまった絵画だなあ。

「あんたはほんと変わんないわねー」

『当たり前だろう、オレはもう完成品だ！これ以上美しくなることなんて不可能なんだぞ！』

私の記憶ではこの前、オレは一瞬ごとに変わるって言ってたように思えるんですが……。

「あー、はいはい」

夏目ちゃんは呆れたように、絵画を見て笑った。

夏目ちゃんは、絵画が話せることを知っている。

普通の人は絵画がいきなりしゃべりだしたらびっくりすると思うんだけど、夏目ちゃんは『あら、あなたしゃべれるの？』なんてなんでもなく受け入れていた。ちょっと聞いた話によるとどうやら夏目ちゃんは変わった体質らしくて、こういう変なものには慣れているらしい。慣れるほど、変わったものがいるの……？見てみたいような、見たくないような……。

さあオレを觀賞しろ、と威張る絵画に近寄って、私はぴつと指を立てる。

「絵画、夏目ちゃん疲れてるんだから後にしてね。夏目ちゃん座ってて、私お茶淹れるね。ホットケーキはメープルシロップ？それと

もちョコシロップ？」

「いや、そんなおかまいなく……」

夏目ちゃんったらなに今更遠慮してるの？全然気にすることないのに。

『疲れている時こそオレを觀賞しろよ！どうだ、癒されるだろう夏目！』

「もう、疲れたらホットケーキに決まってるでしょ？夏目ちゃんはホットケーキを食べるの！」

むむむ、と絵画と睨みあう私。

「あんたたち、実は結構似たもの同士よね……」

なにか夏目ちゃんの声がしたけど、その声は私と絵画の言いあう声にかき消されて、残念ながら私の耳までは届かなかったのでした。

いとこ2

「夏目ちゃん、学校はどう？ 最近はなんか危ない目に会ったりしてない？」

別に気にしなくていいのに、夏目ちゃんは丁重に私の申し出をお断りして、お煎餅をかじった。私は向かいでホットケーキにたっぷりメルシロップをかけて、黄色いバターをのせて食べている。さすが本場のメルシロップはおいしくて、思わずどんどん食べてしまう。なんだか私だけ申し訳ないなあ。

夏目ちゃんはその体質柄、日常的におかしな事態に遭遇している。靈感とかは特にないらしいから心霊現象に会うことは少ないみたいだけど、そのほかのいろいろ……とにかくいろいろに出会う天才みたいな人なのだ。

夏目ちゃんはお茶を一口飲んでから、そう言えば、と口を開いた。

「この前悪魔とゲームしてきた」

「……なにそれ」

予想外の答えに思わず返事が遅れてしまう。

どうして日常会話に悪魔が出てくるの、とか聞いてはいけない。

何故ならこれが夏目ちゃんクオリティーだから。これが紛れもなく夏目ちゃんの日常だから。そしてそのゲームって言うのはおそらくテレビにつないでぴこぴこできたりするあのゲームでは、ないよね……？

「いやー、もうちょっとで魂取られるとこだったわよ。子供みたいな姿のくせにえげつなくってもう……」

私なんて答えていいのかと迷っていると、夏目ちゃんは、

「あ、でも勝ったよ？」

と付け足した。

そういう問題じゃないよ、夏目ちゃん……。

夏目ちゃんはしっかりものなんだけど、なんか常識がずれている
というか、ずれざるを得なかったと言っべきか……ほんと、よく今
まで無事に生きてこられたよなあ……。

そう思えば、この肝の座った性格もなるべくして、ということな
のかな。

私が聞いた限りでも、どう考えても一般人には起こり得ない出来
事が、夏目ちゃんには6月に雨が降るのと同じくらいの確率で起き
ている。つまり私の夕飯がホットケーキなのと同じくらいの確率。

我がイトコながら、恐ろしい人だなあ……。

それでも周りに頼りになるお友達がいるらしいから、ちょっとは
安心だけど。

「なんか、本当に夏目ちゃんって不思議な生活してるよねー」

私がもう笑うしかないので笑いながら言っと、夏目ちゃんは少し
黙ってから、

「いや、あんたもなかなかよ？」

そう言っただけで絵画の方を見て、お互い困ったわね、と唇を上げた。

『おいとうこー！ 茶を飲んだのなら夏目にオレを觀賞させてやれ
よー！ ついでにお前も褒めろー』

「……………」

絵画が後ろで喚いている。

言われてみれば……言われなくてもわかるけど、たしかにこの絵
画も私が息をするのと同じくらいの確率で、いつも同じことを喚い
ているなあ……。

「やっぱり、血は争えないってことなのかしらね」

夏目ちゃんが絵画を見て、私の考えていたのとおなじようなこ
とを言う。

『とーこー！ とーこおおおお！』

絵画の声が、リビングに響き渡る。うるさい。

夏目ちゃんはあるまり情けない絵画の声に、ぷっと吹き出した。
「すみません、うちの絵画が……」

なんか恥ずかしい、恥ずかしいんですけど絵画くん。やめてよもうお客さん来てるのにいい！

私は止まない声に一つ溜息をついて、それから、

「ほんとに、私たちなんでこんなことになってるんだろうね」

と顔を見合わせて、夏目ちゃんと2人、あはは、と笑い笑いをこぼした。

いとこ2（後書き）

いとこの夏目ちゃんです。

本当は夏目の話の方が先にあったんですが、長すぎてなかなか書けません。ちなみに夏目の日常はそれなりにほのぼの、でも割と命の危機にさらされたりしています。

読んでくださってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0276y/>

瞳子の日常

2011年12月1日21時05分発行